安藤先生を送る

文学部教授　遠　山　　淳

安藤洋美先生が定年を迎えられ，本年三月末で退職されることになりました。だれもがいつかは迎えることとはいえ，残される者たちとしては淋しい限りです。

英米の社会では，定年で退職を迎える人々に対して「おめでとう」と言って送り出すのが一般的です。桃山学院大学の定年が70歳であることを伝えると，「もう何年働かなければならないのか」と気の毒そうに言ってくれたアメリカ人の大学教授を思い出します。1980年頃のことでした。当時の日本には，定年が長いのをまだ羨ましがる傾向がありました。20年で，日本もアメリカに随分と似てきたようです。

1978年春。桃大の旧キャンパス，登美丘の研究棟入り口の橋の上で，私は初めて安藤先生にお会いした。非常勤講師として初めて桃大の教壇に立つ私は，安藤先生から簡単なご挨拶を受けた。「教務委員の……です」。お名前はよく聞き取れなかった。ぶっきらぼうで，何だか叱られているような感じを受けました。それが安藤先生の照れであることをしばらくして知りました。お世辞など決して言われない，いや言えない先生の真っ直ぐな性格がよく出ておりました。桃の花が辺り一面に咲いていました。

このようにして始まった関係ですが，翌年私が専任教員として桃大に入ってきたので，あの時の方が数学担当の安藤先生であることを後で知ることになりました。当時の桃大はまだこじんまりとしたもので，教授会も合同で行われ，教員間にもコミュニケーションがよくとれていた。狭い汚い校舎と設

備で，みんな仲良く我慢をしていましたね。やっと学生運動が鎮まり，「さあ，これからだ」というかすかな希望が桃大にも生まれつつあったように思います。

専任として就任して以来，私は学生国際交流の仕事に専念しておりました。一方，安藤先生は大学入試の分野で活躍されていました。豊富な高校教師の体験を生かした，大胆で的確な見識から貴重なご意見と対策を展開されておられました。特に先生の正確な読みは，浮上を願いつつもまだ喘いでいる桃大の進むべき方向を指していたと思います。入試委員長という要職に就かれて，ご専門の数学，統計学，大学受験に対する幅広いご経験の三者が統合され，またそれに加えて歴史家としての読みが加わり，それらは大学経営の戦略の構築にやがて統合されることになります。先生の大学経営の才能が発揮されたのは平成元年の就任以来6か年にわたる法人評議員・法人常務理事としての時期でありました。その中心に新キャンパスの建設と大学の全面移転という大事業がありました。

安藤先生は兵庫県西宮のご出身で，旧制尼崎中学，廣島高等師範を経て大阪大学の数学科を卒業されました。以後長く兵庫県立の高校で教鞭をとられ，昭和43年，桃大の数学担当の専任講師となられました。先生がお書きになった多数のご著書・論文のリストを拝見していると，私は数学とは全く無縁の者ですが，先生のご関心が数学教育，統計学，数学史の分野にあることが分かります。教育という未来への関心，歴史という過去への関心，それをつないでいるのが確率論への関心という構図でしょうか。歴史から学び未来を広げるという仕事をなさってこられたことになります。先生は人間に希望を持たれておられる。

先生は太平洋戦争を旧制中学時代に経験されました。学徒動員では九死に一生を得て，間一髪で危機を逃れるという体験もされました。先生はやっとの思いで，生者として敗戦を迎えられました。しかし，その背後には命を失った学友や多くの大人たちへの鎮魂の思いがあるようです。原爆直後の廣島

も体験されました。先生は人類の狂気をそこに見てしまわれたのでしょう。権力への不信と不服従——これが先生の原点であると推察しております。そして廣島では，生涯の師ともいうべき方との出会いがあって，この教育者の生き方が安藤青年に教育の道を選ばせた，と聞いております。安藤先生は情熱を持って，ひとつの生き方を選ばれたのです。

先生の業績リストを拝見しますと，その業績の多さに驚かされます。たくさんの役職，それもとびっきり多忙な役職をこなしながらの研究業績です。新キャンパス建設であれほど多忙であった時ですら着実にお書きになっておられる。あの大事業の中心人物であったにもかかわらず，本来の研究者という仕事もこなされていたのですね。全力投球で移転事業に当たられていると見ておりましたが，一体どこにあれほどの余力があったのでしょうか。あの細い身体（失礼！）のどこからあのエネルギーが湧いてきたのでしょうか。先生の補佐役としても余りお役に立たなかったわが身に比べ，元気のいい安藤先生の行動力には脱帽です。まったく不思議な方ですね。「参った」としか言い様がありません。

数学の門外漢としては，やはり一番濃いお付き合いがあった移転事業の頃を思い出します。1989年春に理事会内におかれた大学土地問題対策委員会の委員長として，安藤先生がその年の秋に選ばれました。1991年に私が常務理事に選ばれるまで，安藤先生は大学教員選出の常務理事として一人で任に当たっておられました。就任当初は，私は会議に出ても２年間の先行の情報と人間関係の差に，しばらくは苦労をしました。特に交渉相手との人間関係が全くできていないところからの出発でしたので，最後まで割り込むことができずに自分をどこに置いたものか迷い続けました。

連日のようにある交渉のための役所への訪問，そして情報交換と対策のための連夜の会議。帰宅が11時を過ぎることが日常化していました。当時の私は芦屋，先生は西宮という同じ方向に住んでいたため，私の車や，タクシー

でよくご一緒させてもらいました。その中で交わした濃厚な会話は，まるでその日の第2の会議のようでした。質問を交わし，次の対策を立て，手筈を決める。問題点を常に共有するようになってから，自分の身の置き所も見えてきました。自分を少し引いた所に置く。ただしすべてに関与するというのが結論でした。

帰りの車の中では随分と学びました。旧日本軍の話も多かったと思います。多くは，敗戦の話で，指揮官たちの作戦の失敗の分析でした。戦略的な話もよく出ました。国民学校（小学校）2年生で終戦を迎えた私に比べ，安藤先生の世代は戦争体験が桁違いに多く，一方，私たち昭和2桁世代は最初からアメリカ型の「民主」教育を受けてしまったのです。日本史の中からも文武のうちの「武」は消され，剣道も，柔道も学校から消えていた世代なのです。それだけに，先生の話は私には大変に新鮮で，しかも有益でありました。移転および建設計画をめぐって，学内だけではなく住民や府・市・公団と交渉したり説明会を持たねばなりませんでしたので，私たちには「作戦」は常に必要でした。私は実に多くの貴重なことをこの「車中会議」で学びました。

大学移転事業で一番働かれたのが安藤先生でありました。財政面での功労者は佐藤太一事務局長（以下すべて当時）であるとすると，実行部隊のうちで最も功労があったのは安藤先生です。あれだけの行動――神出鬼没・夜討ち朝駆けとしか言い表せない行動ができたのは先生をおいて他には一人もいませんでした。移転事業実施本部にはいろんな役者がそろっておりました。もちろん，まとめ役としての山崎春成学長は高度な判断力を示されました。深い分析と読みでみんなに勇気を与えてくださったのは蕗谷硯児学長室長でした。また職員側の働きも実に立派でした。山川隆慶経理課長の巧みな財政計画は見事に当たりました。それがあって初めて佐藤事務局長の決断と交渉を呼び込むことになりました。中井健二企画課長の交渉のお膳立ては実に見事で，われわれはただそのレールの上を走っただけという感すらあります。守りながら攻めるよい見本でした。建設計画と建設工事での現場では，鈴木輝彦施設課長の厳しいチェックはまさに説得力がありました。施設関係の業

者からの攻勢を一手に引き受けてくれたのが楠本義一学院事務部長（後に管理部長）でした。森西英信大学事務部長，柳井正照庶務部長代理も登美丘キャンパスを守り，また移転事業本部と一体となってこの難事業に当たっていただきました。森本衛総務課長も学舎の設計段階と大学全体の引越し計画に実に緻密な計画とリーダーシップを発揮されました。紅一点西口清美さんもよい働きをしました。中でもとりわけ苦労を一手に引き受けてくれたのが故田中信吾学長室課長でした。新キャンパス建設地の近隣の自治会や教職員の苦情を受ける役を担ってくれたのです。彼の心労は想像を絶するものでした。移転事業が完成し約三年後の1998年１月６日，田中氏は，いや，信吾君は帰らぬ人となりました。雪がちらつく冬の日の彼の葬儀は本当に悲しいものでした。神は大学移転の成功と引き換えに彼の命を奪われたのかとさえ思いました。アンデレ館を超高層化し，その正面玄関にエスカレーターを付けるのが彼の夢でした。今懐かしく思い出されます。職員たちはみんな一丸となってよく働いてくれました。苦しかったときまた楽しかったときの思い出がいっぱい詰まった，懐かしい登美丘を去るのです。みんな桃山学院の「111年目の新たな出発（たびだち）」にそれぞれの夢を描いたのです。

安藤先生は常にこの「軍団」の先頭におられました。その働きは将官でもあり佐官でもあり，また尉官ですらありました。先生のリーダーシップは常に攻めの姿勢でありました。その姿勢をまわりの者たちは，時には攻めの厳しさを心配もしながらついていっていたのですが，実は，先生はなかなかの交渉上手でもありました。関係官庁，大阪府，和泉市，府警，住都公団（当時），建設会社等との数え切れないほどの交渉。常にその先頭に立って，指揮官として全体を見渡しつつ自らも突っ込んでいくというのが先生のスタイルでした。ひとつの例として，正門両側に植えられたドイツトウヒの大木がありました。これは安藤先生が自ら思い付き，交渉され，実現した大阪府緑の基金からの助成を得て植栽されたものです。大変残念ながら，これらの樹木は，施設課の必死の世話にもかかわらず，風土環境と折り合わず枯れてしまい，現在の樹木は２代目となり，近隣の森に育ったスペルセコイヤにかわ

りました。先生は大技だけではなく，このような小技も発揮されたのです。

大プロジェクトの記録には「何がなされたか」に重点がおかれ，「だれが行ったか」はつい忘れがちで，個人としての顔が出てこないことがあります。しかしこのプロジェクトの中心におられ，常に先頭を切って駆け抜けられたのが安藤先生です。もちろん，桃山学院の長い歴史始まって以来最大のプロジェクトには，この計画を実効あるものへと導いた方々がいらっしゃいます。1989年にはもう桃大の全面移転をお考えになっていた稲別正晴学長（当時）の先見性は当然として，故宮道大五理事長（当時）の全面的な支持，また蕗谷先生がご指摘されるとおり，登美丘時代の村田恭雄学長による学院財政の改善政策，第2キャンパスの購入，および稲別学長時代にそれを受けて開設された文学部とその成功がありました。この桃大の上昇ムードに乗って和泉キャンパスへの移転計画がなされました。

先生は大岡昇平の『レイテ戦記』を読まれて桃大の全面移転の決断をなされたと聞いております。教育者としての人間重視，歴史から未来を見つめる研究者としての理想，実践者としての行動を支える方略，これらの三者があいまって実現したのが桃大の移転でした。

奇しくも，移転事業で協働した蕗谷先生もこの春にご定年で桃大を去られます。かつての仲間が，それぞれの「思い」がいっぱい詰まった桃山を去られるのは本当に淋しいことです。私自身の「思い」が皆さんの「思い」にいくえにも重なって，共有した場と時間が支え合っているのです。ここでは私は私であって私ではないのです。

「思い」が通い合って，熱い気持ちが感じ合えた多忙な4年間でした。新キャンパスの完成間近か，最後にドラマがありました。1995年1月17日早朝。阪神大地震。西宮・門戸厄神の安藤先生のご自宅も，甲子園の蕗谷先生のご自宅も，芦屋の私の自宅も，程度の差こそあれ少なからず被害を受けました。しかし新キャンパスに被害はありませんでした。そして4月20日，新キャンパスの竣工・移転開学式典を迎えました。そこには晴れがましく，誇らしく胸を張って立つ仲間たちがいました。

安藤先生，ありがとうございました。この和泉キャンパスはわれわれの家です。われわれの未来です。

安藤先生の末長い御健勝と一層の御活躍を心よりお祈り申し上げます。